

死

ノ事ヲ問、石文ガ曰、只湖山ノ間ニ在テ、風景ノ好ニ對スル耳、他見所ナシ、因テ思之、我昔叡山ニ登、湖水ヲ見、大ニ心目ヲ悦ス、然シヨリ後敢忘ズ、時々復往、コレヲ觀ト欲ス、冥途ニ見所恐ハ是ナル歟、コトニ知平生心中ニ一物ナカルベシ、石文ガ此語最ヨシ、禪者ニ非バ、必地獄天堂說、

〔類聚名義抄〕死和シ、ス。

〔伊呂波字類抄〕死シ、ス。

變 往 損 終 去 爰 迂 殂 殒 殞 崩帝王 薨公卿以 滅僧滅 殒 卒 畏 殞 殞 瘞

〔名物六帖〕生老禍福畢命七啓、田光伏、叙于北、燕、公叔畢命于西秦、

下世曹植詩、秦穆先下、世三臣皆自殘、 即世古傳考略、即世猶去世也、

〔釋名〕人死氣絕曰死、死漸也、就消漸也、

〔萬葉集〕有由緣并雜歌、厭世間無常歌中

鯨魚取海哉、死爲流、山哉、死爲流、死許曾、海者潮干而山者枯爲禮、

右歌一首

〔倭訓栞〕編十一しぬ 日本紀に死をよめり、歌にもいのちしなましとみゆ、去の義也、さり反し

也、音にあらず、一説に、過ぬ也、すぎ反し也、神代紀に神去といひ、死をまかるとよみ、万葉集に過去人と見えたり、

〔古事記傳〕死は志邇と訓べし、書紀雄略卷歌に、伊能致志儺磨志とあり、なほ萬葉にも古言なり、

志爾は過去なり、須岐は志と切る、志奴留は過去るなり、然るを志邇は、死字の音とおもふは非ず、

〔日本書紀〕七十六年三月甲辰、天皇崩于橿原宮、

〔日本書紀〕三十三三年五月、天皇不豫、癸酉崩、時年八十四、

〔古事記〕於是與登美毘古戰之時、五瀨命於御手負登美毘古之痛矢串、中到紀國男之水門而

詔、負賤奴之手乎、死爲男建而崩、